

## 名詞化接辞「方」に於ける問題

著者名(日)	藤巻 一真
雑誌名	Scientific approaches to language
巻	2
ページ	1-24
発行年	2003-03-25
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1092/00000073/">http://id.nii.ac.jp/1092/00000073/</a>

# 名詞化接辞「方」に於ける問題\*

藤巻一真

東京国際大学・作新学院大学

本稿では、日本語の名詞化接辞の「方」を取り上げ、その意味的・統語的問題を扱う。特に Hoshi(2002)等で主張されている  $\theta$ -理論との関連で、「方」名詞化に関して付加詞の解釈について問題を提起し、Hoshi の枠組みで、付加詞も項と同様の認可の仕方をすべきであることを提案する。また、生産性の高い「方」接辞による名詞化に於いて意味的共起制限があることを示し、同枠組みでは意味解釈に於ける問題として扱うことを提示する。最後に「方」自身の解釈に於ける多義性について取り上げ、その多義性は恣意的ではなく「方」に付加される述語の持つ動作性に関係していることを示す。

## 1. はじめに

接辞の中でも語形成に於ける生産性の高いものに「方」があり、最近の研究ではどこでこの現象を捉えるかとかこれに絡んでどのような道具を用いるか等が問題となっている。例えば飯田(2002)では語彙部門で HPSG の枠組みでこの現象を捉える分析をしている。また、伊藤・杉岡(2002)では、語彙的統語表示(Argument Structure)にて規則(Rule)によって派生されたとする。また Hoshi(2001)では完全に統語構造に依存した形で「方」を捉える分析を提案している。

---

\* 本研究は井上和子先生主催の研究会で発表させて頂き、井上先生を初め伊藤健人、大倉直子、上田由紀子、綿貫啓子の各氏から貴重なご意見を頂いた。また、神田外語大学言語科学研究センター主催(CLS)のコロキアムにて星宏人氏と直接意見を交換させて頂き、長谷川信子先生を初め参加者の皆さんから貴重なご意見を頂いた。また、山田昌史氏にはこの研究をするに当たり、CLS にて大変お世話になった。この場を借りて感謝の意を表する。

本稿は、各分析に於ける比較はせずに、深層構造 (D-structure) が独立した部門として認められることがなくなった極小主義 (Chomsky 1995) の枠組みで語形成を捉えようとしている Hoshi の分析に従い、「方-名詞句」に於ける現象を取り上げ議論する。

先ず、本稿で中心として扱う「方」接辞による名詞化とは、(1a)の文に「方法・手段、様子・様態」を表す接辞の「方」を付けて名詞化することと言い、(1b)のようなものを説明の便宜上「方-名詞句」と呼ぶことにする。「方-名詞句」に含まれる要素としては、名詞化接辞の「方」とそれに接続する時制を含まない述語と、その述語の項がある。(1b)においては、接辞の「方」と述語の「読む」とその項である「太郎」「本」がそれらに当たる。

- (1) a. 太郎が本を読む。
- b. 太郎の本の読み方

(1b)の表す意味としては、(2b)の「方法」を用いた場合と同様である。

以下、現在までに観察されている基本的な特徴を挙げる。先ず、統語的な特性が、(2b)と「方-名詞句」とでは異なる。

- (2) a. 太郎の本の読み方
- b. 太郎が本を読む方法

「方-名詞句」の場合は、「読む」の項である「太郎」や「本」は属格の「の」で表されている点が「方法」を使った場合と異なる。これは、「方」と「方法」は異なるものであり、(2a,b)の構造がそれぞれ異なることを意味している。ただし、「読む」の項である「太郎」と「本」が格は異なれども、どちらも同じ意味役割を得ている点は共通である。<sup>1</sup>

さらに、統語的使役形の「させ」を含んだ文も「方」を用いて名詞化することができる。

---

<sup>1</sup> これら文と「方-名詞句」に於ける透明性等については伊藤・杉岡(2002)を参照。

- (3) a. 太郎がマリーに本を読ませた。  
b. 太郎のマリー（へ）の本の読ませ方

同様に受け身形の「られ」を含んだ文も「方」を用いて名詞化することができる。

- (4) a. その本が学生に読まれている。  
b. その本の学生による読まれ方

そこで、Hoshi (2002a)では、「させ」「られ」等の統語的な要素を「方」接辞を用い名詞化できることから「方-名詞句」を統語部門で派生させることを他の証拠と共に主張し、次節で概観する新しい意味役割付与に於ける理論の妥当性を議論している。

「方-名詞句」について基本的な特徴をまとめると、以下のようになる。

- (5) a. 統語的要素の「させ・られ」と結合することが可能である。  
b. 述語（動詞）の項は属格で現れる。

以上の「方-名詞句」の基本的な特徴をもとに、以下、「方-名詞句」に関連した新たな例を提示し、Hoshi の主張する  $\theta$ -理論の妥当性を検討する。以下、2 節では Hoshi の  $\theta$ -理論の概略をまとめる。次に、3 節で「方-名詞句」に於ける付加詞の解釈の問題を取り上げ、Hoshi の分析を掘り下げる方向で解決案を提示する。さらに4 節では「方-名詞句」に於ける意味的共起制限があることを示し、特に「原因格」との問題を取り上げ議論する。また、これに関連して「方」自身の解釈の多義性について述語の表す事象の動作性に関連していることを示す。先ず、次節で Hoshi の意味役割付与の新たな理論の概略を観てみることにする。

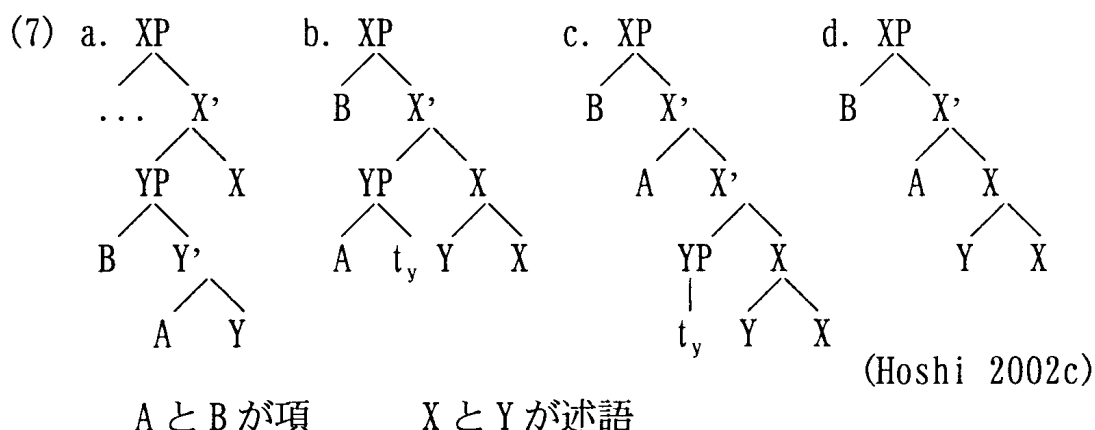
## 2. Hoshi (2002) に於ける $\theta$ -理論の概略

Hoshi の  $\theta$ -理論は Saito & Hoshi (1994, 2000) に於ける日本語の Light Verb 「する」の分析に基礎を据え、その他の構文の分析を経て現時点で

(6)に至っている。<sup>2</sup>

- (6) A predicate can assign  $\theta$ -roles from anywhere at any point of the computation, as far as it is within the projection of a lexical category. (Hoshi 2002c)

(6)によると、述語の意味役割は基本的に TP, CP の介在がなければ語彙範疇の投射内にある限りにおいて、かなり自由にどの位置からでも与えられることになる。<sup>3</sup>ただし、その与えられ方は、UTAH 等の意味役割の階層 (Thematic Hierarchy) に従ってなされるとしている。<sup>4</sup>この理論は、Hale & Keyser (1993) で提案され Chomsky (1995) 以後 Hale and Keyser とは別の形で統語部門に取り入れられた構造・階層 (configuration) に直結した意味役割の解釈とは大きく異なるものである。<sup>5</sup>特に重要と思えるものは、日本語に於いては以下の 4 つの可能性があるのでに対して、英語に於いては (7a) しかないという点である。



(7a) は、A と B が述語 Y の項であり、Y の最大投射内で意味役割が与えられる。これが英語に於ける意味役割の与えられ方である。他の可能性は、特に構造をもとに意味役割を与える (解釈する) 理論に於いては、排除

<sup>2</sup> 詳しくは Saito & Hoshi (1994, 2000) 及び Hoshi の一連の研究を参照。

<sup>3</sup> 日本語の T(ense) に関して Hoshi では意味役割付与を妨害しないとしている。

<sup>4</sup> UTAH については Baker 1988 を参照。D-structure を仮定しないモデルでの UTAH は Saito & Hoshi (1994/2000) 等を参照。また、注 16 を参照。

<sup>5</sup> 極小モデルにおける Agree (一致) に基づく意味役割付与の分析に長谷川 (2002) がある。

されている。先ず(7b)では、述語 Y の項 B が X の投射内にあり、その位置で Y が X に付加された時またはその後に Y から意味役割が与えられる。(7c)では、Y の項である A も B も X の投射内にあり、Y が X に付加された時またはその後に意味役割が与えられる。(7d)に於いては、そもそも Y が派生の初めから他の主要部である X に主要部直接付加(direct head adjunction)されている点が他のものと最も異なっている。その他の点は基本的に (7c) と同様で、Y の項 A と B が両方とも X の投射内にありその位置で意味役割を与えられる。次節から観ていく「方-名詞句」についてはこの(7d)を想定している。

以上が概略であるが、次節で Hoshi が「方-名詞句」に対して(7d)を取るとする根拠の一つである付加詞「上手な」の解釈について、問題を提起し議論する。

### 3 「方-名詞句」に於ける付加詞の解釈

#### 3.1 「上手に・な」の解釈 1 : Hoshi 2001,2002a

Hoshi (2001, 2002a)では「方-名詞句」が主要部直接付加構造を取る証拠の一つとして「上手に・な」の解釈を挙げている。

- (8) a. ジョンがマリーに上手に本を読ませた。  
b. ジョンのマリーへの上手な本の読ませ方 (Hoshi 2002a)

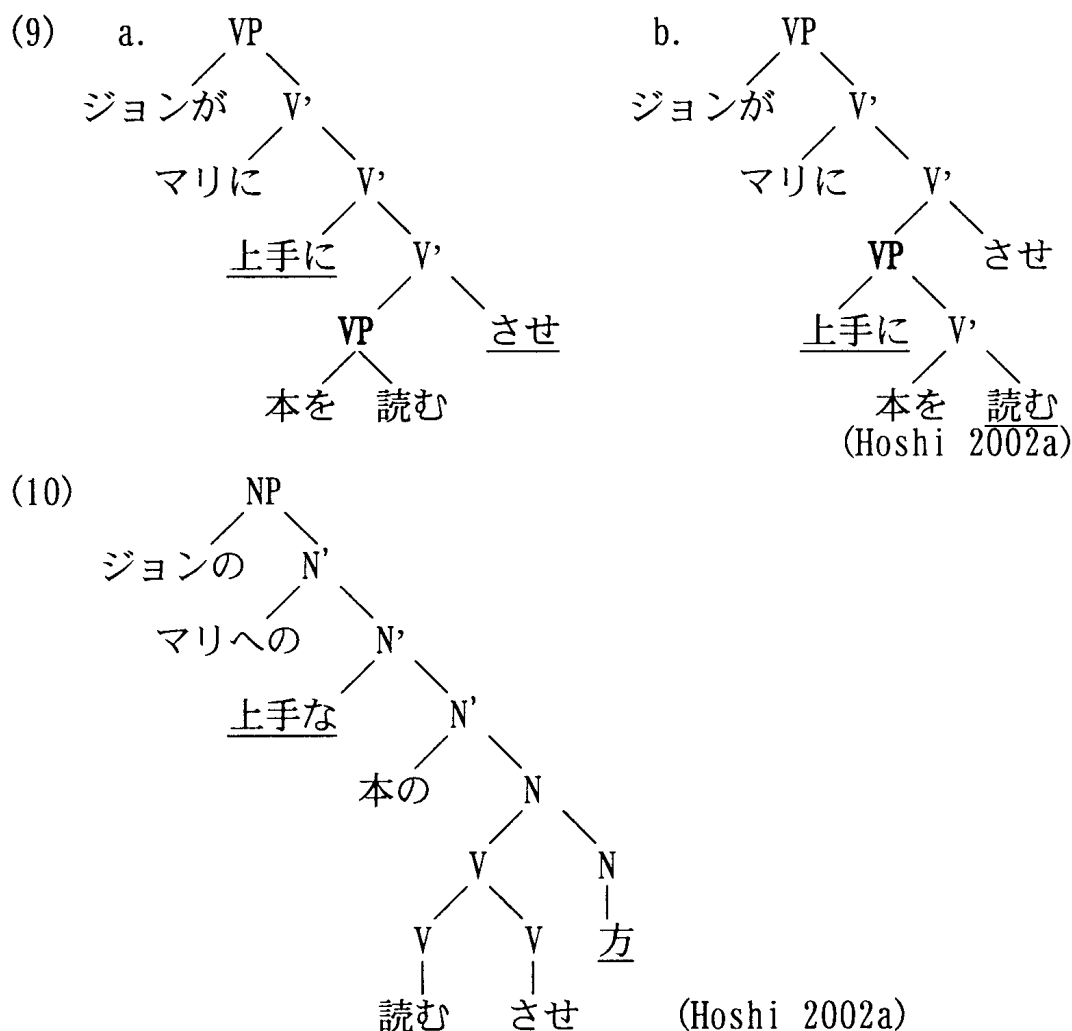
(8a)に於いて「上手に」が述語の「読む」に係る解釈と使役の「させ」に係る解釈があるが、(8b)に於いては「上手な」が「読む」に係る解釈がなく「方(法)」に係る解釈しかないとしている。<sup>6</sup>

なぜこのような差が生じるかというと、(8a)に於いては、使役の「させ」が VP 補文を取り、「上手に」が生起する位置に関して2つの可能性があるので、解釈も2通りあるということである。一方、(8b)の「方-名詞句」においては「上手な」が構造上「方」に係る解釈しかできない

---

<sup>6</sup> 「方」に係る解釈とは「させ方」にかかる解釈とここでは取るが、この両者に於いて議論に関連した解釈の差があるかは現段階では不明である。

位置に生成されているから一義的であるというのが説明である。つまり、「方-名詞句」の例では内部に VP 補文を取ることはないからこそ、「上手な」が「方」にしか係る解釈がないということである。構造で示すと以下のようなになる。(下線部と字体は筆者加筆)



ここで大切なのは、「上手な」がいわゆる連体形であり、それが認可される位置、つまり、NP 内にあるということである。そしてこの「上手な」が認可される位置と解釈される位置が同一になっていることが、「方-名詞句」に於ける事実を説明する上での利点であるとしている。<sup>7</sup>

さらに次の例を用いて「上手な」が「方」（この場合は「さ」）に係る

<sup>7</sup> 仮に、「上手な」を「読む」に係る解釈にする場合、少なくとも「読む」の投射内に「上手な」を生成し、その後「上手な」を形式的に認可するために NP (DP) 内へ移動するという分析を取ることになる。ただし、この分析は、他の証拠等から採用していない。詳しくは Hoshi (2001, 2002a) を参照。

ことを傍証している。つまり、「上手な」が、「方」と構造上同じ位置にある「さ」に係るので意味解釈が不自然になるということである。

- (11) a. ジョンがマリーに上手に本を読ませたい  
b. ジョンのマリーへの(\*上手な)本の読ませたさ

(Hoshi 2002a)

さて、以上が Hoshi (2002a) での「上手に・な」の解釈の概略であり「方-名詞句」対して(7d)を取る理由の一つであるが、この解釈に関して少々問題があるように思えるので、次に同様な例と共に、若干の考察を加えてみることにする。

### 3.2 「上手な」の解釈 2

まずは次の単純な例から観てみることにする。(12)では「上手な」がどの位置にあらうと「方」に係る解釈が可能である。<sup>8</sup>

- (12) a. 上手な花子の本の読み方  
b. 花子の上手な本の読み方  
c. 花子の本の上手な読み方

次に問題の使役形を含む例であるが、確かにどの位置にあっても「上手な」が「方」に係る解釈しかないように思える。

- (13) a. 上手な太郎の花子への本の読ませ方  
b. 太郎の上手な花子への本の読ませ方  
c. 太郎の花子への上手な本の読ませ方  
d. 太郎の花子への本の上手な読ませ方

その証拠として、「方」に係る句としては不自然な語句に「上手な」を変えてみると次の例のように不自然である。強いて解釈をしようとする

---

<sup>8</sup> 但し、もう一つの可能性である「読む」に係る解釈と「方」に係る解釈に於いて有意義な差があるかというこの例に関しては不明であり、以下の議論でもこれに関しては問題とならない。



「眼鏡を使って」の「方（法）」になり、状況としていささか不自然である。

- (14) a. ??眼鏡を使っての太郎の花子への本の読ませ方  
b. ??太郎の眼鏡を使っての花子への本の読ませ方  
c. ?太郎の花子への本の眼鏡を使っての読ませ方

ところが、次の例を観てみると事情が変わってくる。先程と同様に「方」に意味的に係りにくい語句を使っているが、どうやらこれらの語句は「方」に係ると言うよりも「歌う」に係っている解釈が自然である。

- (15) a. 太郎の花子への歌の高い音域での歌わせ方<sup>9</sup>  
b. 太郎の花子への歌の速いテンポでの歌わせ方  
(16) a. 高い音域での太郎の花子への歌の歌わせ方  
b. 太郎の高い音域での花子への歌の歌わせ方  
c. 太郎の花子への高い音域での歌の歌わせ方

特に次の例は「上手な」を使ってはいるが「歌う」に係る解釈が可能であると思う。

- (17) 太郎の花子への歌の上手な歌わせ方

さらに、受け身形が絡んだ次の例でも、下線を施した付加詞が述語に係る解釈が可能である。<sup>10</sup>

- (18) a. その本の花子による（からの）上手な読まれ方  
b. その歌の花子による高い音域での歌われ方  
c. その本の花子による眼鏡を使っての読まれ方  
d. その家のブルドーザーでの壊され方

---

<sup>9</sup> これらの語句の位置は「方」に一番係りにくいと思われる位置に置いてあるが、他の位置でもこの解釈が可能であると思える。

<sup>10</sup> (18e-g)ではそれぞれ「太郎」「子供」の意図的な「方法」という解釈も可能に思える。(54)も参照。

- e. 太郎の花子による (からの) バットでの殴られ方
- f. 太郎の犯人からのナイフでの刺され方
- g. 子供の父親からの上手な愛され方

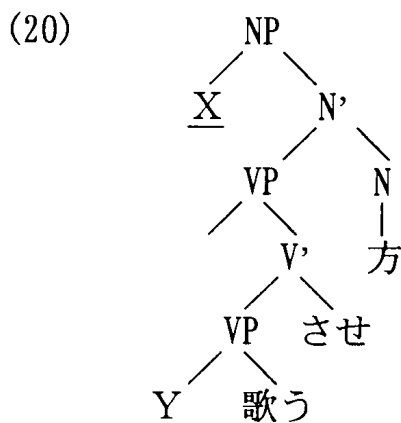
以上の例から、付加詞が述語に係る解釈が可能であることが分かる。そうすると何らかの形でこの付加詞が述語によって認可されていることになる。以下、これが提起する問題について考察する。

### 3.3 問題

ここでは上記観察が正しいとした場合に生じる問題点を挙げ、その解決を試みる。先ず、Hoshi によると「上手な」の解釈が一義的に「方」に係る解釈しかないことが「方-名詞句」に対する構造の、一つの証拠であり、意味役割付与の理論との関連で重要な事実であった。しかし、もし「上手な」および他の付加詞の解釈が必ずしも一義的でないとしたら次のような問題が生じる。

- (19) a. Hoshi の構造でどうやってこの事実を説明するか。
- b. Hoshi の構造以外でどうやってこれを説明するか。

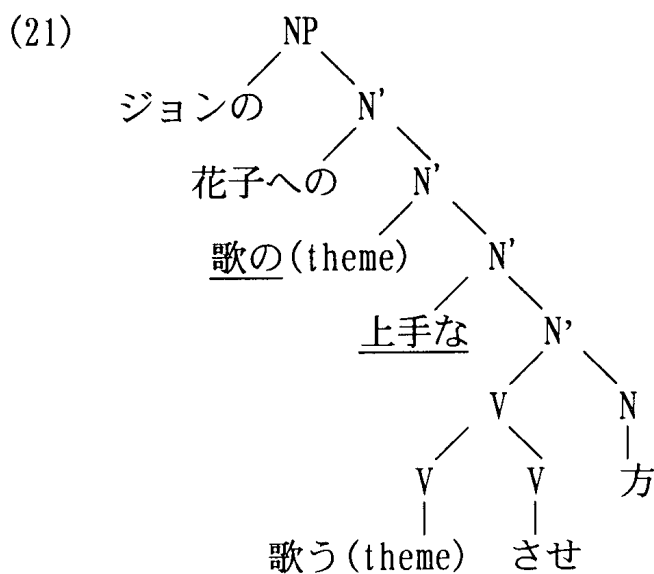
仮に(19b)の立場に立ち、Fukui & Nishigauchi (1993)のように「方」がVP 補文を取っているとする「上手な」を生成する位置を区別することにより解釈の差を説明することができる。



XとYが付加詞が生成される位置であり、どちらに係るかは位置によっ

て保証される。<sup>11</sup>

次に(19a)の立場でどう解決できるかを考えてみる。この場合(21)のように位置的には一カ所である。これでは「方」に係る解釈しかないというのが問題なのであるが、項への意味役割の与えられ方を考慮に入れると付加詞の解釈の問題も解けそうである。意味役割を与えられる項と述語の関係であるが、「歌う」の項である「歌」がNPの領域で意味役割を与えられるとするのがHoshiの理論の重要な点である。そうだとすると付加詞も同様に「読む」との関係が成り立つとするのが自然である。付加詞だけが付加詞を認可するものの投射内になければならないとする方が問題と考えられる。もし、この方向が正しいとすると「上手な」等の付加詞も「読む」等の述語によって認可され、「読む」に係る解釈が可能になるわけである。残る解釈の「方」に係るものはNP内にありN'に直接支配されているので問題なくその解釈がでるのである。



大切なことは、付加詞の「上手な」はNPの投射に直接支配される位置に生成されているが、「歌う」の項である「花子」「歌」と同様に「歌う」から認可されるということである。

そうした場合に次に問題となるのは、一方の解釈しかない(15, 16)であ

<sup>11</sup> 但しこの場合Yに生成された付加詞の形態がNPの投射により認可されることになるので移動が必要となる。Chomsky (2001)のAgreeを仮定すれば移動の必要はなくなる。

るが、解釈する段階では「方」に係る場合と「述語」に係る場合の2つが可能であるが、解釈の結果一方が意味的に不自然であるので、そちらの解釈が出てこないと説明できる。但し、両方の解釈が不可能であると言われる「\*上手な本の読ませたさ」(=(11b))の説明は今のところ説明ができないので問題として残る。

まとめると、「方-名詞句」に於ける付加詞の解釈がHoshiの構造に投げかけた問題は、Hoshiの意味役割の理論の本質と関係していて、項が述語と持つ関係を付加詞も同様に持ち得るとすることによって解決できるのではないかということを議論した。次節では「方-名詞句」に於けるもう一つの現象を観てみる。

#### 4 「させ方」と原因(格)

この節では「方-名詞句」に於ける新たな現象とそれが提示する問題について考察する。まずは、「方-名詞句」内部に生起する述語の(外)項に於ける制限を眺めてみる。<sup>12</sup>

##### 4.1 「方」のとり述語の(外)項について

ここでは、「方」とそれに接続する述語の(外)項(対応する文に於ける主語になる名詞句)の意味役割について詳しく観てみる。次の例で述語「読む」の項は「太郎」と「その本」であり、一般に「太郎」は「読む」の外項と考えられている。

- (22) a. 太郎がその本を読んだ  
b. 太郎のその本の読み方

さて、「方-名詞句」に於いても同様に、「太郎」は属格で現れているがやはり述語「読み」の外項と考えるのが自然である。問題は、その際、意味役割は何かということである。上記例では「太郎」は明らかに動作主(agent)である。以下に典型的な例を観てみるが、一見特に制限が無いかのように思える。

---

<sup>12</sup> 以下「述語の(外)項」と「対応する文の主語」とは基本的に同じ物のことを指す。

- (23) a. 家が壊れた  
       b. 家の壊れ方
- (24) a. 雨が降った  
       b. 雨の降り方

これらの場合は「家」「雨」は対象(theme)である。(25)のように「移動」は動作主の解釈と対象の解釈が可能な述語であるが、「方-名詞句」に於いてもそれが反映され、以下の例ではそれぞれ「太郎の」が動作主で「石の」が対象となっている。<sup>13</sup>

- (25) a. 太郎が車/石を移動した  
       b. 太郎の車/石の移動のし方
- (26) a. 石が移動した  
       b. 石の移動のし方

また、経験者(experiencer)の場合も問題なく「方-名詞句」が作れる。以下の例で「太郎」は「悩む」の外項であり経験者であるとする、「方-名詞句」に於ける「太郎」も経験者と考えられる。

- (27) a. 太郎が自分の将来を悩んだ  
       b. 太郎の自分の将来にたいする悩み方

以上の例から、「方-名詞句」に於いて、対応する文の主語に当たる名詞句(述語の(外)項)の意味役割に関しては特に制限がなさそうである。

## 4.2 「させ」と「方」名詞化

上記の例では「方」接辞と接続する述語に特に制限が無いように思えるが、以下に挙げるように「原因(cause)」と考えられる意味役割を主語にとる使役文・他動詞の場合は「方」接辞を付けて名詞化できないようである。まず、以下の(28b)の「台風で」は原因である。そうであれば(28a)の「台風」も原因と考えるのが自然である。

---

<sup>13</sup> (26b)で対象である「石」はもともと内項の位置で生成されているとするが、移動が関与しているかどうかは、本稿の議論に関係はない。

- (28) a. 台風が電車を遅らせた  
 b. 台風で電車が遅れた

これらを「方-名詞句」にすると(29)になる。(29a)が示すように「原因」が主語となっている時に「方」接辞による名詞化ができないようである。また、ただ単に原因と共起しないということではないことは、(29b)から明らかである。(29b)に於いては、原因である「台風による」が現れているが問題なく「方-名詞句」を作ることができる。<sup>14</sup>

- (29) a. \*台風の電車の遅らせ (遅れさせ) 方  
 b. 台風による電車の遅れ方, ??台風での電車の遅れ方

次の例も、上記の例と同様に「方-名詞句」内の述語の外項が「原因」の時、非文であることを示している。

- (30) a. その音楽 (第九) が観衆を楽しませた  
 b. \*その音楽 (第九) の観衆の楽しませ方  
 (31) a. その指輪 (プレゼント) が花子を喜ばせた。  
 b. \*その指輪 (プレゼント) の花子の喜ばせ方  
 (32) a. その噂が花子を悩ませた  
 b. \*その噂の花子の悩ませ方

これに関して、使役の「させ」が問題なのではないかという単純な問いがあるがそうではないことは、Hoshi が扱った例や次の例から分かる。

---

<sup>14</sup> 「道具 (格)」の場合は良さそうである。(i, ii は井上和子氏提供)

- i. 草刈り機の草の刈り方
- ii. 電子レンジの (冷凍肉の) 解凍のし方
- iii. ?乾燥機の衣類の乾かし方
- iv. \*ドライヤーの髪乾かし方

また、伊藤健人氏指摘による以下の例は原因 (格) だが良い例である。

- v. 台風 13 号の大雨の降らし方

これらは、井上(1976)の言う自発性に関係しているようであり、そうすると動作主としての解釈が、井上の言うように2次的に出てくるからであろう。伊藤氏は内部からのエネルギーと関係しているのではと指摘しているが井上と同様のポイントである。

ここで大切なのは「させ」の外項が意図的な行為者としての動作主かそれとも非意図的な原因（格）かということである。以下の例は、いずれも意図的な行為者としての動作主である。

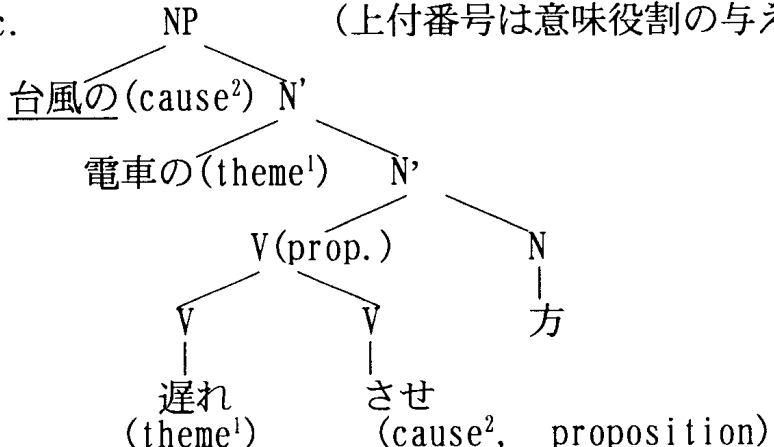
- (33) a. 太郎が花子に本を読ませた  
       b. 太郎の花子への本の読ませ方
- (34) a. 太郎が花子を心配させた  
       b. 太郎の花子の心配のさせ方

以上をまとめると次のような観察的な一般化ができる。<sup>15</sup>

- (35) 主語が原因格で表される文は「方」による名詞化が不可能である。

### 4.3 分析

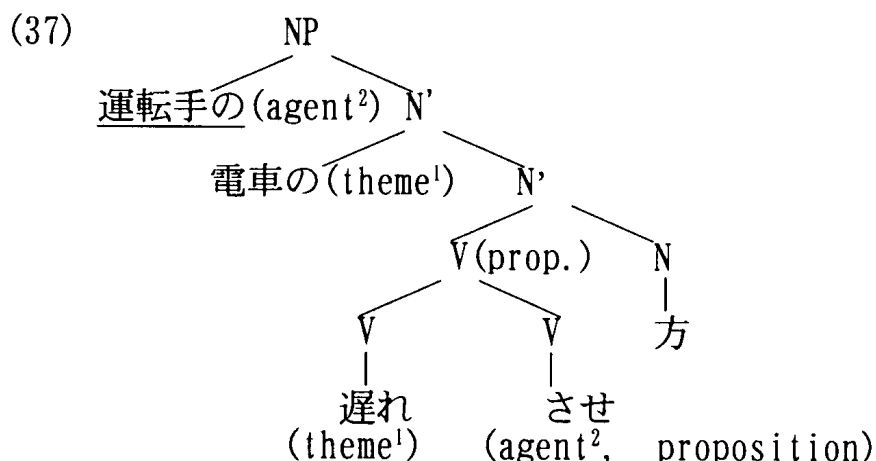
さて上記の一般化はどう説明するのが妥当であろうか。ここでは「方-名詞句」に関して Hoshi の構造を仮定して議論する。先ず、次の例に於いて述語は「遅れ」「させ」であり、「遅れ」は対象(theme)を「させ」は原因(cause)と命題(proposition)を項として取るとする。

- (36) a. 台風が電車を遅らせた  
       b. \*台風の電車の遅らせ (遅れさせ) 方  
       c. 

<sup>15</sup> 原因の使役文以外に以下に挙げるように「可能文」が「方」名詞化を拒むが本稿では取り上げていない。

- i. \*太郎のイタリア語の話し方  
 ii. \*太郎の歩き方

仮に意味役割の付与が、Hoshi が言うように意味役割の階層 (Thematic Hierarchy) に従うとして、(36a)に於いて「電車」に対象が、「台風」に原因が与えられるとすると、(36b)に於いても(36c)に示すように意味役割が与えられる。対応する文に於いて意味役割付与ができる以上、「方-名詞句」に於いても特に問題がないわけである。<sup>16</sup>このことは、次の動作主の場合と同様の構造であることを考えれば当然である。



さて、構造や意味役割の付与に特に問題がないとするとどこに問題があるのでしょうか。可能性として、意味解釈ができないまたは意味解釈の結果その意味が不自然・異様であるとする方法がある。以下この線での説明を試みる。

まず、上記例に於いては、意味解釈をする上で(38)を仮定する。

- (38) 「方-名詞句」に於いては、対応する文の主語に当たる名詞句に関しての「方法・手段」または「様子・様態」と解釈される

そうすると(36c)では原因格である「台風」に対して「(電車を遅れさせる) 方法・手段」または「(電車を遅れさせる) 様子」という解釈を与えることになる。しかし、この解釈は不自然である。次の例も同様である。

<sup>16</sup> ここでは以下のような階層を仮定している。

i. agent/cause>experiencer>goal/source/location>theme

Cause の位置が問題かもしれないが、それだと(36a)も非文になるはずである。また(36c)の命題は直接付加と同時に与えられるとする。



- (39) a. \*その音楽（第九）の観衆の楽しませ方 (= (30b))  
 b. \*その指輪（プレゼント）の花子の喜ばせ方 (= (31b))  
 c. \*その噂の花子の悩ませ方 (= (32b))

先ず、下線部の名詞句に対して「(～させる) 手段・方法」の解釈は「手段・方法」を取りうる人物等ではないので不可能である。例えば、(39b)の「その指輪」は「手段・方法」を取れない訳である。<sup>17</sup>次に「(～させる) 様子・様態」の解釈であるが、これも人物等のでないので不可能で、「指輪」がある行為をする「様子・様態」を表すのは不自然である。

但し、「様子」にすると(40)のように良くなるので「方-名詞句」に於いても同様の解釈が可能なのではないかという疑問が生じる。しかし、この場合は、いわゆる関係節であり構造が「方-名詞句」とは異なる訳である。意味解釈に於いても出来事・事象に関する「様子」という解釈になると思われる。<sup>18</sup>

- (40) a. [[その音楽（第九）が観衆を楽しませる]様子]  
 b. [[その指輪（プレゼント）が花子を喜ばせる]様子]  
 c. [[その噂が花子を悩ませる]様子]  
 d. [[台風が電車を遅らせる]様子]

まとめると、構造的には「方-名詞句」に於いて「方法・手段」または「様子・様態」という解釈を強制するが、原因の名詞句についてこれらの解釈をしなければならない場合は、意味解釈が不可能・不自然になるということである。以下、この方向での説明の妥当性を検討する。

<sup>17</sup> 杉岡洋子氏から cause は manner を記述できるほど動作や現象の中心ではなく変化の主体の方が manner を記述しやすいのではないかとコメントを頂いた。本稿での説明と整合性があると思われる。

<sup>18</sup> (40)の「が」格主語を「の」格にするとやはり不自然に感じる。

- i. \*[その音楽（第九）の[観衆を楽しませる]様子]  
 ii. \*[その指輪（プレゼント）の[花子を喜ばせる]様子]  
 iii. \*[その噂の[花子を悩ませる]様子]

#### 4.4 「方-名詞句」の多義性

前項において「方-名詞句」に於ける「原因（格）」との問題を、統語的構造を踏まえた上での意味解釈の問題として説明を試みた。ここでは、これを発展させて、他の現象の説明も試みる。但し、現段階では問題も残るのがそれも議論の対象としておく。

さて、他の現象とは「方-名詞句」に於ける「方」の多義性についてである。「方」には概略「方法・手段」という意味と「様子・様態」という意味があると思われる。そして、この解釈の違いは恣意的と言うよりは、今まで観てきた「方」に付加する述語が表す内容・事象がどのようなものであるか、特に事象が動作性のものであり動作主を含むかどうかに関連していることを示す。

以下の例は、自動詞と他動詞の対応があると言われる例であるが、他動詞の「乾かす」の方は、動作主が関係していることから(41a)の「太郎」の「(洗濯物を乾かす) 方法・手段」に取るのが自然である。また、動作主「太郎」の「(洗濯物を乾かす) 様子・様態」として取ることも可能であろう。これに対して対応する自動詞の「乾く」の場合は、動作主が現れないことから、それ以外の物、例えば(41b)の「洗濯物」の「(乾く) 様子・様態」を表し、「洗濯物」の「(乾く) 方法・手段」の解釈がないと言える。<sup>19</sup>

- (41) a. 太郎の洗濯物の乾かし方 「太郎」の乾かす方法・様子  
b. 洗濯物の乾き方 「洗濯物」の乾く様子

---

#### iv. ?[台風の[電車を遅らせる]様子]

<sup>19</sup> 次の例は「洗濯物」の結果状態を表す。(井上和子・伊藤健人氏提供)

シワシワのの状態のシャツを指して不平を言っている場面を想定して頂きたい。

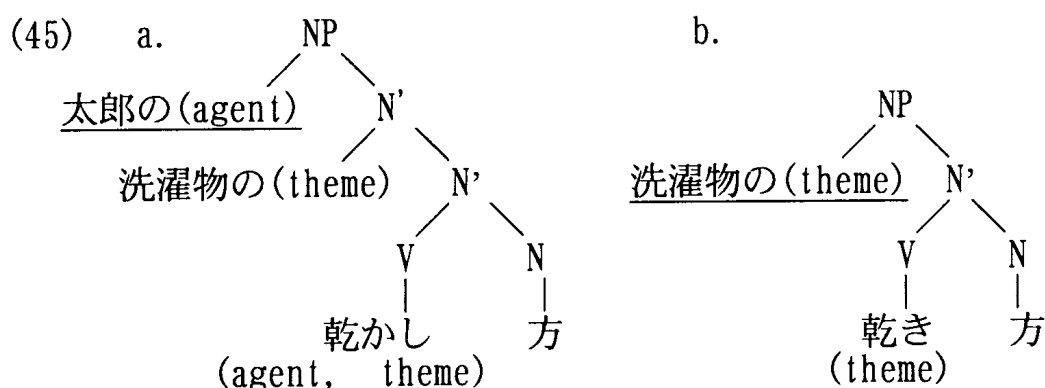
- i. こんなシャツの乾かし方でどうするの？
- ii. 太郎の洗濯物の乾かし方ときたらいつもこう。
- iii. こんな乾かし方ってある？

これが正しいとすると、状態変化を伴う述語は「結果状態」の解釈が可能であるになる。さらに、自他の両方の「方-名詞句」にこの解釈が可能である。そうすると、特に問題になるのが、他動詞の場合、その内項である「対象」の結果状態を表すことが可能になるので、この解釈をどう出すのかということである。可能性としては(45a)が(45b)を構造上含んでいることと関連していると考えられるが、今後の課題とする。

以下の例も同様の点を示している。

- |      |    |            |                 |
|------|----|------------|-----------------|
| (42) | a. | 太郎の雨の降らし方  | 「太郎」の雨を降らす方法・様子 |
|      | b. | 雨の降り方      | 「雨」の降る様子        |
| (43) | a. | 建設業者の家の壊し方 | 「建設業者」の壊す方法・様子  |
|      | b. | 家の壊れ方      | 「家」の壊れる様子       |
| (44) | a. | 太郎の本の売り方   | 「太郎」の売る方法・様子    |
|      | b. | 本の売れ方      | 「本」の売れる様子       |

このことを図示すると以下のようなになる。述語の表す内容・事象と下線を施したもの(動作主かどうか)との関係で「方」の解釈が異なってくるわけである。特に、動作主を含んでいない(45b)では「方法・手段」の解釈が出てこないのである。



また、次の例は経験者格が述語の外項と考えられる例であるが、「経験者」の「(経験の)方法・手段」の解釈というよりは「経験者」の「様子・様態」と取るのが自然である。

- |      |    |                      |
|------|----|----------------------|
| (46) | a. | <u>太郎</u> の心配のし方     |
|      | b. | <u>太郎</u> の将来に対する悩み方 |
|      | c. | <u>太郎</u> の悲しみ方      |
| (47) | a. | <u>太郎</u> の暑がり方      |
|      | b. | <u>太郎</u> の痛がり方      |
|      | c. | <u>太郎</u> の嫌がり方      |
|      | d. | <u>太郎</u> の魚の好み方     |

次に自他を形態上区別しない述語の「移動」に関しても同様である。

- (48) a. 太郎の車の移動の仕方                      「太郎」の方法・様子  
      b. 車の移動の仕方                              「車」の様子

但し(48b)に於いて「方法・手段」の解釈ができそうであるが、それは行為者として誰かまたは一般の人を想定している可能性がある。或いは「車」を擬人化して扱い、移動の行為者として解釈している可能性がある。

最後に名詞化された場合の述語の項の現れ方に関して、外項の具現化は義務的ではないことについてひとこと言及しておく。<sup>20</sup>問題は外項が現れない場合はその位置がどうなるかということである。例えば、(49a)で外項に当たる「太郎の」が現れない場合、「太郎の」が占めるべき位置があるかどうかである。自然な解釈として誰かを想定しているか一般の人を想定している解釈が成り立つ。特に(49c)との対比でそれは明らかである。(49c)は「洗濯物」が(自然に)乾いていく解釈であり特に行為者の乾かす人を想定している解釈はないと言える。<sup>21</sup>

- (49) a. 洗濯物の乾かし方  
      b. (太郎の・人の)洗濯物の乾かし方  
      c. 洗濯物の乾き方

なぜ、このことが問題かと言うと先に挙げた「原因(格)」が述語の外項になっている例との関連があるからである。次の(50a)の解釈であるが、仮に外項に当たる名詞句が占める位置がなかったとすると(50a)の解釈は(50b)の解釈でも(50c)の解釈でも可能であるということになる。ところが、(50c)の解釈はあり得ないので、なぜそうなのかが説明が付かなく

---

<sup>20</sup> 名詞化された際の項の具現化の仕方の詳しい議論はGrimshaw(1990)を参照。

<sup>21</sup> 同様な例に於ける落ち着きの良さや悪さがあるようである。(大倉直子氏提供)

i. イースト菌の増やし方

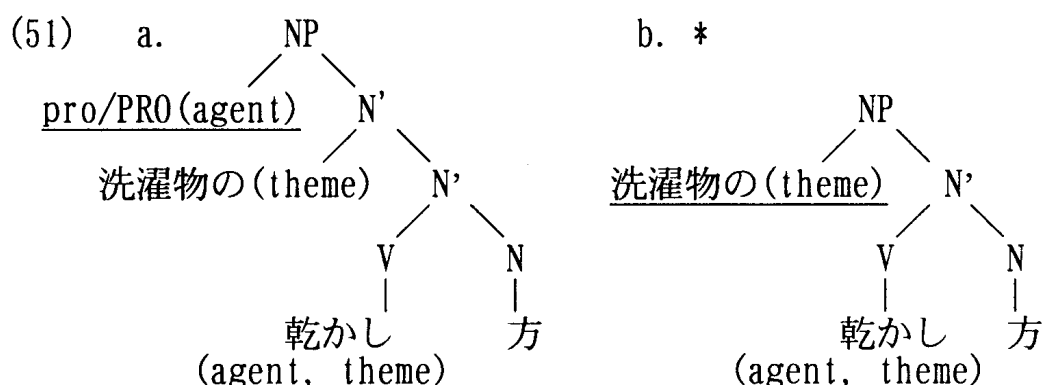
ii. \*?松井(へ)のボール球の打たせ方 (松井が打つの解釈で)

自他対応のある(i)は良いのではないかと言うことであるが、そうだとすると本稿に於ける他の現象と関わるのが、今後の課題とする。

なるのである。

- (50) a. ( ) 観衆の楽しませ方  
 b. 演出者の観衆の楽しませ方  
 c. \*その音楽 (第九) の観衆の楽しませ方

そこで、(49a)は外項が現れない場合でも位置があると仮定し以下のようになっていると考える。



まとめると前節での説明を拡張して「方」の多義性に関わる問題に対しての説明を試みた。「方」の解釈の可能性に関しては恣意的なものと言うよりはむしろ述語の表す事象と動作主との関連で捉えることを議論した。

#### 4.5 受け身文の問題

最後に受け身文に於ける「方」の解釈の問題とその解決の方向性を示すことにする。次の例は受身形を使った例であるが、上記説明からすると「様子・様態」の解釈は自然にできるが、「方法・手段」の解釈がでないことになる。

- (52) a. 本の読まれ方                      方法・様子  
 b. 太郎の殺され方                    方法・様子  
 c. 歌の歌われ方                      方法・様子  
 d. 辞書の使われ方                    方法・様子

仮に、(38)を仮定し下線を施した名詞句の特性により「方」の解釈が決定されるとすれば、「方法・手段」の解釈ができないはずなのだが、それ

が可能である。特に「本の方法・手段」等の解釈は「本」が行為者に慣れない以上不可能である。このことは（外）項だけを問題としていると説明をつけがたい現象であるが、述語の表す内容・事象がどのようなものであるかも考慮に入れることで説明が可能となる。なぜかという上記のような受け身には動作主が何らかの形で存在するとするのが一般的であり「方法・手段」を動作主が決定することができるからである。<sup>22</sup> これにより「本」の「(学生によって読まれる) 方法・手段」という解釈が可能となる。

同様に、次のような例では「太郎」の「(～される) 方法・手段」の解釈が可能である。これは動作主の存在から説明できる。勿論、「太郎」の「様態・様子」の解釈もできる。

- (53) a. 太郎の (花子による) 叩かれ方  
b. 太郎の (花子による) 叱られ方

さらに、「太郎」の意図的に選択した「手段・方法」の解釈も可能であるように思える。特に次の受け身文では明らかにその意図性を感じ取ることができる。

- (54) a. 太郎の (花子からの) わざとらしい怒られ方  
c. 太郎の (先生からの) 意図した叱られ方

これらのことは、受け身の分析と関わる大きな問題を含むので内部構造に関しては詳しく取り上げないが、仮に、Kitagawa & Kuroda (1992) が言うように「太郎」にある種の動作主の解釈があるとすれば、ここでの分析から当然出てくると予想される解釈である。

---

<sup>22</sup> 受け身の分析は大きな問題であり分析が割れるところだが、どの立場を取るにせよ、何らかの形で動作主の存在を保証することになる。受け身文に於ける「わざと」等の副詞に絡んだ議論に関しては Kitagawa & Kuroda (1992) を参照。英語の Middle にも表面には現れない動作主が関係している。これに関しては Keyser & Roeper 1984 を参照。

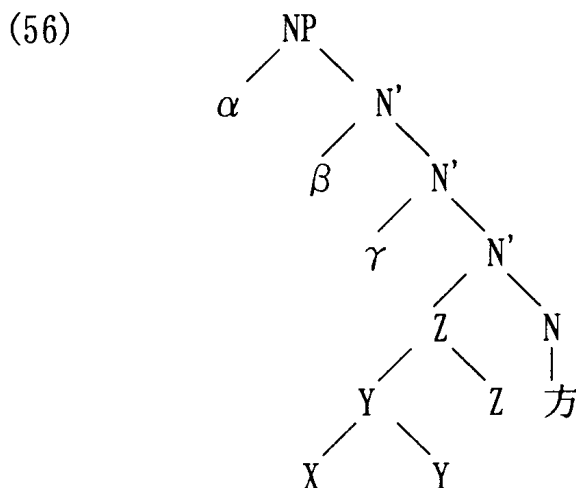
## 5. まとめと今後の課題

本稿では「方-名詞句」に於ける付加詞の解釈、共起制限、「方」の多義性について Hoshi (2002a-c) の分析に従い問題点を挙げ議論をした。ここで扱った現象に関しては Hoshi の分析を一步進める形で解決の方向を示した。

今後の課題としては、使役文を「方-名詞句」にした(55)で、「させ」に接続する述語「泳ぐ」「走る」の方法の解釈があるようだが、もしそうならばこの解釈をどう出すかという問題がある。<sup>23</sup>

- (55) a. プールでの子供の泳がせ方 泳ぐ方法  
b. 子供の走らせ方 走る方法

このことは注 19 で言及したように自他の対応がある文を「方-名詞句」にした際も同様の問題が生じている。言葉を換えていうと、「方-名詞句」に於いて述語が複雑になった場合にどこまでが(どの述語またはどの項までが)「方」と関係を持てるのかという問題である。図示すると以下のようになる。



(56)に於いて $\alpha$ がZの項で $\beta$ がYの項で $\gamma$ がXの項だとしたときにどれが「方」と関係を持てるかが問題となる。これに関しては自他対応のあ

<sup>23</sup> この解釈は井上和子氏指摘による。

る述語と使役文や、どこまで語彙化されるか等について外崎(2003)が語形成と統語構造との関連で詳しく議論しているが、ここでの分析との整合性も含め今後の課題とする。

## 参考文献

- Baker, Mark. 1988. *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*. University of Chicago Press.
- Chomsky, Noam. 1995. *The Minimalist Program*. MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2001. Derivation by Phase, in M. Kenstowicz, ed., *Ken Hale: A Life in Language*. 1-52. The MIT Press.
- Fukui, Naoki and Taisuke Nishigauchi. 1993. Head-movement and Case-Marking in Japanese. *Journal of Japanese Linguistics* 14. 1-35.
- Grimshaw, Jane. 1990. *Argument Structure*. The MIT Press.
- Hale, Kenneth and Samuel Jay Keyser. 1993. On Argument Structure and the Lexical Expressions of Syntactic Relations, in Hale, K. and J. Keyser, eds., *The View from Building 20, A Festschrift for Sylvain Bromberger*. MIT Press.
- 長谷川信子. 2002. 「主要部内在型関係節: DP 分析」 *Scientific Approaches to Language* 1:1-33 言語科学研究センター 神田外語大学
- Hoshi, Hiroto. 2001. Relations between Thematic Structure and Syntax: a Study on the Nature of Predicates in Japanese, in Lee H. and S. Hellmuth, eds., *SOASWPL*, 203-247. SOAS, University of London.
- Hoshi, Hiroto. 2002a. Theta Theory and Word Formation in Syntax, in J. Abe, ed., *Minimalization of Each Module in Grammar*, 51-79. Tohoku Gakuin University.
- Hoshi, Hiroto. 2002b/to appear. Domains for Theta Marking, in *Proceedings of the 2002 Linguistic Society of Korea International Summer Conference*, Kyung Hee University.



- Hoshi, Hiroto. 2002c/to appear. (Non)configurational Theta Marking in *Proceedings of Linguistics and Phonetics 2002*, Charles University and Meikai University.
- 飯田雅代. 2002. 「名詞化現象の語彙論的考察」『文法理論：レキシコンと統語』9-32 東京大学出版会.
- 井上和子. 1976. 『変形文法と日本語 下』大修館書店.
- 伊藤たかね・杉岡洋子. 2002. 『語の仕組みと語形成』研究社.
- Keyser Jay Samuel and Tomas Roper. 1984. On the middle and ergative constructions in English. *LI* 15: 381-416.
- Kitagawa, Yoshihisa and S.-Y. Kuroda. 1992. Passive in Japanese, Ms., University of Rochester, New York, and University of California, San Diego.
- Saito, Mamoru and Hiroto Hoshi. 1994/2000. The Japanese Light Verb Construction and the Minimalist Program, in R. Martin, D. Michaels, and J. Uriagereka, eds., *Step by Step: Papers in Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*. 261-295 MIT Press.
- 外崎淑子. 2003. 『述語の統語構造と語形成 - 意味役割の表示と状態述語、心理述語、使役構文からの提言 - 』神田外語大学博士論文

350-1197

埼玉県川越市の場北 1-13-1

東京国際大学

商学部

*fujimaki@tiu.ac.jp/QZS01062@nifty.ne.jp*